

日本語パートナーズ《台湾第一期》 活動のご紹介

日本台湾交流協会では、2017年2月より、台湾での日本語教育を一層充実させるため、独立行政法人国際交流基金の委託を受けて「日本語パートナーズ」台湾派遣事業を開始しました。日本語パートナーズは、主に台湾の高校で授業を行っている台湾人日本語教師のティーチングアシスタントとして、発音や会話のサポートをしたり、日本文化を紹介したりして、先生や生徒、さらには地域の人たちと交流を深めることができるほか、自身でも現地の文化や言葉を学ぶことができます。この度、台湾一期として2017年2月から6月まで約5ヶ月間台湾へ派遣した5名のパートナーズの、台湾での活動所感を、今月より3回に分けてご紹介致します。

1. パートナーズの活動を通して

〈1〉 日本語パートナーズ 台湾1期 掛川幸子

私たち台湾1期の日本語パートナーズは、パートナーズ経験者の中から選ばれました。このお知らせメールを見たとき、「あ、台湾ならもう一度パートナーズができるかもしれない」と思い、応募しました。派遣の1年前、偶然遊びで数日間台北旅行をしましたが、それ以前の來台は4半世紀も前のことになりますから、なにしろ去年来たとき、浦島太郎状態で、全く昔と違う国になっている、と驚きました。パートナーズ台湾1期として赴任地が台北市立成功高中に決まり、去年の旅行を布石のご縁に感じました。

私の以前の赴任地はタイ南部のナコンシータマラート県の高校でした。ここは山田長政ゆかりの地です。南部では2番目に大きな町でしたが、高層ビルはほとんどなくて、日本人は3人しか住んでい



ませんでした。そのうち2人は日本語パートナーズで、1人は私です。それに比べると、台北は東京と変わらない大都会で、近いし、日本についての情報もあふれています。歩いていると日本人とよくすれ違おうし、日本語が上手な台湾人も多く見受けられます。このような台北でどのように日本文化紹介をしたものか、と考えました。



特に、当初の日本語授業で、宿題のレポート発表を見学させていただいた時のことです。日本文化について自分たちでテーマを選び、調べたことを発表する内容でした。2人1組で、2組が発表しましたが、1組は抹茶について、2組目は日本の都市伝説について、興味を持った事柄について調べ、パワーポを使って発表しました。これを見たとき、私が調べて発表するような形式の文化紹介では弱いと思いました。その程度のことは彼らが自分でできます。せっかく日本人がいるのですから、もっと生の何かを伝えたい、いきいきとした楽しい体験をさせてあげたい、そして直にコミュニケーションしたほうがいい、と思い、これを活動方針にしました。

早速1番初めに浴衣を着る体験を提案しまし



た。あるクラスで「浴衣を着てみたい人」と先生が言うと、ほとんどの学生が手を挙げてくれて、ホッとしました。男子は着物などに興味ないかな、とおっかなびっくりでしたが、1クラス7名しか着せられないのが残念

なほど盛況でした。日本語クラスは週4回の2コマに14クラスが並行的に勉強しています。同じ時間帯ですから、全部のクラスに回ることはできません。活動が始まると大忙しでした。クラスはそれぞれ特徴があり、浴衣を着るだけでも運営する先生によって変わります。あるクラスでは、浴衣を着たまま買い物ロールプレイの仕上げのビデオを撮ったり、アニメ映画「君の名は」の主題歌を全員で大合唱したり、雰囲気が大いに盛り上がりました。また、着物を着ると、男の人はよく懐に手を入れていることに気付いた先生は、それにはどのような理由があるのか検索していました。坂本竜馬が懐に手を入れた銅像は有名です。このように文化を発展的にいろいろな角度から見られることが素晴らしい勉強だと思いました。こうして台湾の日本語の先生の技量の高さを知りました。

また、ある時はけん玉でゲームをしました。導入部分を説明するのも先生方の工夫が見られました。ある先生はyoutubeで、アニメ「ドラえもん」



ののび太くんが小さいころ、おばあちゃんがのび太にけん玉を教えているシーンを見せたりして、私が教室に行く前に学生の関心をアニメから引っ張ってくれました。けん玉は日本生まれの古いおもちゃですが、今や世界競技大会もあるゲームなので、大会で披露するような連続技をyoutubeでクラスの学生に見せてくださったり、先生とのコミュニケーションもだんだんスムーズになっていきました。

実は赴任した直後は、私たち日本語パートナーズの役割や、TT(ティームティーチング)の手法についてはまだほとんど台湾では知られていないようでした。自分の経験から私ができることをアピールしながら説明しましたが、TT授業の声がなかなかかからず、もどかしいスタートでした。それもそのはず、台湾独自の事情があって、日本語の先生は99%他校と掛け持ち授業をしているのが現状だと知りました。当校の日本語の先生は7人ですが、なかなか一堂に打ち合わせすることができません。それどころか同時刻にいくつものクラスがあるので、私がどの先生のクラスに入って、その時何をするか調整に手間取ってしまいます。しかも先生方は授業時間に登校して、授業が終了すると速やかに移動されます。私たちはLINEを駆使して連絡を取り合いました。ようやく流れができて、実はこれから充実した内容の段階へと進める矢先、気が付けばもう4か月経っていました。もう間もなく帰国しなければなりません。

もっと腰を据えてこの学校の学生のためにいい授業のお手伝いがしたかった、というのが実感です。もっとみんなを笑顔にしたかったです。語学の勉強は本来楽しいものです。外国語を初めて話した時の気恥ずかしさ、うれしさや興奮が異文化の世界へ自分を連れて行ってくれた一歩だったはず。当校の学生はたいへん優秀で、目標も早くから定まっている様子で、それだけにこの先も厳しい競争にさらされていて、授業が終わると塾



通いの学生も多く、皆わき目もふらず勉強しています。そんな中で1年間だけ選択科目の日本語を履修しているのですから、せめて楽しんでいつの間にか役立つ表現も覚えていた、というふうになればいいなと思っていました。男子学生はクールに構えているような印象でしたが、多分シャイな年頃だからでしょう。日本語の授業に革命が起こるほどはじけ飛ばしてあげたかったですが、そんな力は発揮できませんでした。

授業の空き時間は毎日図書室に待機して、休み時間の20分間を利用して話しに来る学生を待ちました。初めのころは1年生も数人連れ立って、話しに来てくれましたが、だんだん固定メンバーになっていきました。最後までほぼ毎日顔を出してくれたのは、自由時間がある3年生でした。非常に流暢に話せて、台湾人であることを忘れるほ

ど自由に話題が広がりましたが、ドラマを見て言葉や表現を覚えたというから驚きです。片言の学生もいましたが、徐々に聞き取りに慣れていって、翌日の同じような質問にはキチンと答えられるようになっていきました。その上達ぶりがよくわかり、うれしかったです。本人はとても日本語を勉強したがっていました。

こんなこつこつとした活動が一つでも若い人の役に立つって素晴らしくありがたいことだと思います。私が彼らにしてあげられる何十倍ものことを彼らからしてもらっているのを実感します。これだから、日本語パートナーズはやめられません。何が楽しいって、若い希望の塊集団とともに過ごす時間があるというだけで、自分が元気になるのが分かります。出したエネルギーはこうしてチャージされるのが正しいのではないかとさえ感じます。

タイに赴任した時も、毎日笑って暮らしました。毎日わけもなく、幸福でした。人には確たる理由がない、ただ幸せであるとか、充足感に包まれているという感覚があります。台北ではさらに多くの人達との出会いがあり、親切な人柄に感動し、日本との接点をたくさん見て、台湾文化に融合した古い日本に触れることもありました。実に様々なことが吸収できたと思います。素晴らしい体験を本当にありがとうございました。学生皆さんの台湾の未来を担う力を信じて、いつまでも応援しています。